

Strix 7 : 255-262 (1988)

鎌倉周辺におけるタカ類の渡り調査報告 (1987)

鎌倉自主探鳥会グループ¹

はじめに

神奈川県下におけるタカ類の渡りに関しては、田丸義夫氏を中心とする日本野鳥の会・神奈川支部会員有志の調査により、データの蓄積がはかられている。

私たち鎌倉自主探鳥会グループも、この8年間、鎌倉・源氏山をフィールドとして、毎月定例の自然観察会を実施しており、毎年9月・10月に、鎌倉・天園及び逗子方向から、源氏山を経由して西方に向うサシバ・ハチクマ等を観察記録している。

これまでに得られている断片的な知見を総合すると、房総半島富津岬付近から浦賀水道を渡り、三浦半島南部に至り、逗子二子山・池子を経て鎌倉から西方へ向うタカ類（主にサシバとハチクマ）の渡りルートが想定される。また、横浜市・円海山方向から南下し、鎌倉・天園を経て源氏山から西方へ向うルートも想定される。

これらの想定ルートに基き、鎌倉市を通過するルートをより明確に把握することと、今後の調査法を確定することを今年度の目的として調査を実施した。

その結果、不十分な点が多く残されているが、想定されていた陸上のルートとは別に、相模湾の東部海上を西方に向うサシバの群が観察され、海上にも渡りのルートを想定する必要があることが判明したので、中間報告として公表したい。

調査の概略

鎌倉市内及び周辺で、タカ類が通過すると想定した上記のルートを中心に、なるべく見通しのきく観察地点（①～⑧）を選び、図1のように配置した。

観察調査は、9月下旬から10月中旬の土・日曜日に、各観察地点に1～3名を配置し、(財)日本野鳥の会の『タカ渡り調査マニュアル』に準拠して、各観察地点において観察されたタカ類の個体数と移動方向・高度等を計時的に記録した。

各観察地点（①～⑧）の観察条件と選定理由は、以下の通りである。

① 天園

標高150m。ほとんど全方位を見渡せる。円海山と二子山、源氏山を一望できるので、主に陸上を飛ぶ個体の源氏山への飛来ルートを確認しやすい。

1988年9月17日受理

1. 〒248 神奈川県鎌倉市佐助2-6-1 岩田晴夫方 鎌倉自主探鳥会グループ

調査参加者／荒井恒人、石井真吾、市来崎隆、岩田晴夫*、川上克己、久保頌三*、久保廣晃*、佐藤望、津田宗治*

福田ももこ*、松原浩、渡辺宏之（*：執筆者）

② 源氏山公園

標高90m。水平方向の見通しは悪いが、上空を通過し飛去する個体を観察しやすい。毎年サシバ等が多数記録され、鎌倉周辺の渡りの要所になっていると考えられる。

③ 披露山・大崎公園

標高60～90m。陸側と海側が、それぞれやや異なる地点から一望できる。三浦半島方面から源氏山への飛来状況を確認しやすい。

④ 稲村ヶ崎公園

標高40m。北側の視界は林に遮られるが、海上の視界が広く、主に海上を飛ぶ個体を観察しやすい。海上から飛来し、上陸または海上を西方へ飛去する個体の確認ができる。

⑤ 笛田公園

標高60m。鎌倉山で南側の視界を遮られるが、源氏山より西側の陸上の視界が広い。源氏山から西方へ飛去する個体を観察しやすい。

⑥ 七里ヶ浜配水池

標高80m。鎌倉山で北側の視界を遮られるが、南方の海上と西方が一望できる。稲村ヶ崎から江ノ島まで見渡せるため、稲村ヶ崎から西方へ飛去する個体を観察しやすい。

⑦ 片瀬山配水池

標高60m。南側に配水施設があるが、源氏山～六国見山～藤沢市街地の一部までが見渡せる。笛田公園から陸上を西方へ飛去すると想定される個体を観察しうる高台である。

⑧ 江ノ島南東岸

標高2m。断崖で北西側の視界を遮られるが、稲村ヶ崎から茅ヶ崎の鳥帽子岩までの海

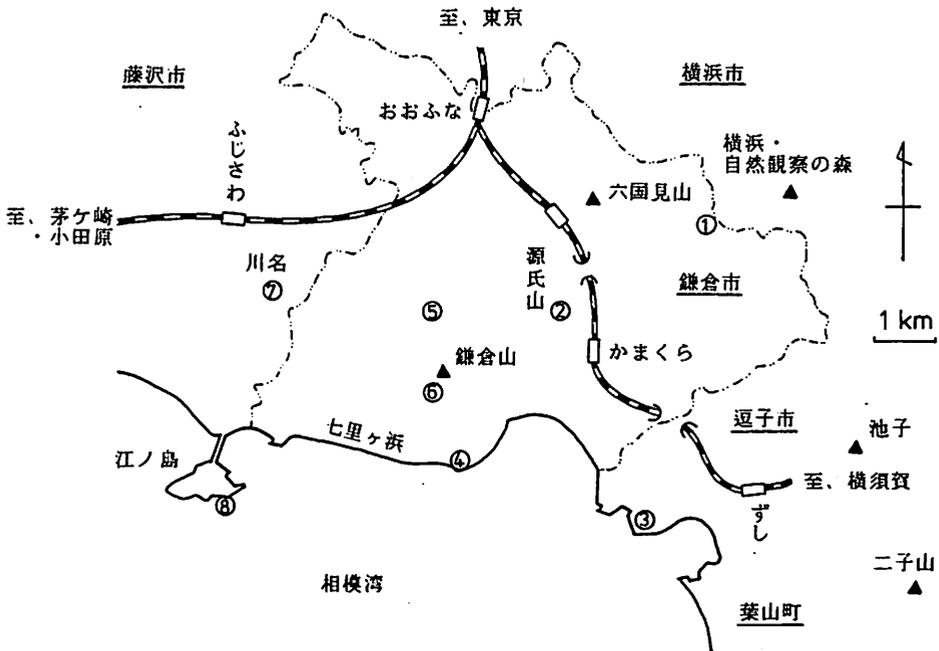


図1. 鎌倉周辺におけるタカ類の観察地点配置図 (1987)

Fig.1. Locations of the observation points around Kamakura.

上を一望できる。稲村ヶ崎から海上を西方へ飛去する個体の飛去方向を確認しやすい。

経過および結果

1. 9月23日(水) 晴れ

調査法の説明、実習と下調べを兼ねて、源氏山(7:30~11:30)にて観察調査をした。ハチクマ5羽(暗色型3羽, 淡色型2羽, 西へ飛去)が観察された。横浜自然観察の森(9:00~15:15)では、サシバ22羽, ハチクマ6羽が観察されている。

2. 9月27日(日) 曇り

源氏山を中心とした想定ルート上の飛来方向観察地点として、天園と披露山を選び、また飛去方向観察地点として、笛田公園を選び観察調査した。天園(7:45~10:30)では、地着きと思われるチョウゲンボウ1羽とサシバ1羽(北東から飛来し, 南西へ飛去)が、観察された。披露山(8:00~11:00)では、タカ類は観察されなかった。この時点では想定ルートを陸上のみと考えていたため、海上の視界を得られない地点で観察していた。源氏山(7:41~11:17)では、サシバ1羽(南東から飛来し, 北西へ飛去)とハチクマ1羽(淡色型, 北西から飛来し, 南東へ飛去), タカ sp. 1羽(南東から飛来し北西へ飛去)が、観察された。笛田公園(9:00~11:30)では、サシバ3羽(南東から飛来)が観察された。曇りのため見通しがきかず、タカ類はあまり観察されなかったが、次列風切羽の一部が欠落したサシバを、トランシーバーによる連絡で追尾観察した結果、天園→源氏山間を1時間25分かかって移動したことが確認された。

3. 10月3日(土) 晴れ

再度、源氏山, 天園, 披露山, 笛田公園にて観察調査した。天園(8:25~9:45)ではタカ類は観察されなかった。披露山(8:40~12:00)では、サシバ34羽(北西へ飛去)が、海上を渡り、源氏山周辺へ至るのを確認した。源氏山(10:15~12:45)では、サシバ61羽(東または南東から飛来し, 西へ飛去), ハチクマ1羽(南から飛来し, 北へ飛去)が、観察された。笛田公園(8:00~15:00)では、サシバ92羽(南側を西へ飛去), ハチクマ1羽(東北東へ飛去), ノスリ1羽が観察された。横浜自然観察の森(9:30~14:55)では、サシバ4羽, ハチクマ2羽, ハイタカ1羽が観察されている。なお、披露山(9:25, 西から東へ), 笛田(14:11, 南から西北西へ), 横浜自然観察の森において、ミサゴが各1羽観察された。

4. 10月4日(日) 晴れ

前日の各観察地点の情報を総合すると、披露山から源氏山を経て鎌倉北西部へ向うルートと、鎌倉山の南側を西へ向うルートが、サシバの主な移動ルートと考えられた。そこで源氏山, 笛田公園と共に、鎌倉山の南側を通過するサシバの群の動きを確認するために、七里ヶ浜配水池と片瀬山配水池を加えて観察調査をした。源氏山(7:50~12:00)では、サシバ27羽(東または南東から飛来し, 西へ飛去), ハチクマ4羽(西へ飛去)とハヤブサ1羽(9:30, 東から飛来し北西へ飛去)が観察された。笛田公園(7:55~12:00)では、サシバ182羽(南側の遠方を南西または北西へ飛去)が観察された。七里ヶ浜配水池(9:00~13:15)では、サシバ236羽(南側の遠方を西または北西へ飛去)が観察された。片瀬山配水池(8:10~12:00)では、サシバ15羽(南から飛来し北西へ飛去), ハチクマ1羽(南から飛来し北西へ飛去), ツミ? 1羽(西へ飛去), ノスリ1羽(西北西

へ飛去)が観察された。横浜自然観察の森(7:20~15:00)では、サシバ31羽, オオタカ1羽, ハヤブサ1羽, ツミ or ハイタカ3羽, チョウゲンボウ1羽が観察されている。なお、源氏山にて観察されたハチクマ(淡色型)1羽を追尾移動観察した結果、源氏山から梶原, 手広, 川名を経て、藤沢市街地へ向うのが確認された。

5. 10月10日(土)曇りのち晴れ

前回、南の海上から稲村ヶ崎周辺を経て、海上を西方へ移動するサシバの大きな群が確認されたので、この群の飛来飛去を確定することに主眼を置き、源氏山, 大崎公園, 笛田公園, 七里ヶ浜配水池で観察調査をした。大崎公園(7:00~12:30)では、サシバ99羽(西または北西へ飛去)が観察された。源氏山(7:30~12:30)では、サシバ37羽(南東から飛来し北西へ飛去), ハチクマ3羽(北西へ飛去)が観察された。笛田公園(8:00~15:00)では、サシバ201羽(南側の遠方を西へ飛去), ノスリ2羽, チョウゲンボウ1羽, ハヤブサ1羽, タカ sp. 2羽が観察された。七里ヶ浜配水池(7:50~13:30)では、サシバ58羽(南側遠方を西へ飛去)が観察された。横浜自然観察の森(7:35~16:20)では、サシバ12羽, ハイタカ1羽, ノスリ1羽, ツミ or ハイタカ2羽, ミサゴ1羽, ハヤブサ2羽が観察されている。海上を渡るサシバの出発地点が小田和湾近辺であり、海上に出て上昇気流に乗れなかった個体が途中で上陸すること、笛田で鎌倉山越しにみられたタカ柱は、実際には海上に存在していることが確認された。北よりの風が強いためか、陸上を飛ぶサシバのルートは、北よりに変化していた。

6. 10月11日(日)晴れのち曇り

前日の結果を再度確認するために、大崎公園, 源氏山公園, 稲村ヶ崎, 江ノ島にて観察調査をした。大崎公園(8:00~11:30)では、タカ類は観察されなかった。源氏山(8:00~12:30)では、サシバ2羽, ハイタカ1羽が観察された。稲村ヶ崎(8:00~11:00)では、サシバ155羽(南から飛来し西へ飛去)が観察された。江ノ島(8:00~10:00)では、サシバ16羽(南東から飛来し西へ飛去), ハチクマ1羽(南から飛来)が観察された。横浜自然観察の森(7:10~15:00)では、サシバ2羽, ハチクマ1羽, ツミ or ハイタカ2羽が観察されている。稲村ヶ崎において前日の結果を再確認できたほか、ハチクマ1羽が、南方海上より江ノ島へ直接飛来するのを確認した。

7. 結果のまとめ

以上の各観察地点において観察されたサシバの個体数をまとめて表1に示した。

表1. 鎌倉周辺の各観察地点におけるサシバの渡り状況(1987)

Table.1. The number of Gray-faced Buzzard-Eagles *Butastur indicus* counted at each observation point.

期 日	天 気	①天 園	②源氏山 公園	③披露山 大崎公園	④稲村ヶ崎 公園	⑤笛田 公園	⑥七里ヶ浜 配水池	⑦片瀬山 配水池	⑧江ノ島 南東岸
9/27	曇り	1	1	0	—	3	—	—	—
10/3	晴れ	0	61	34	—	92	—	—	—
10/4	晴れ	—	27	—	—	182	236	15	—
10/10	曇後晴	—	37	99	—	201	58	—	—
10/11	晴後曇	—	2	0	155	—	—	—	16

*①~⑧は、図1の観察地点を示す。数字は、カウントされたサシバの個体数。「—」は、未観察地点。

従来から、三浦半島・鎌倉にタカ類の渡りルートが存在することは、よく知られていたが、今回のように相模湾の東部海上で、多数のサシバの渡りを確認した報告はないと思われる。以下、観察結果を分析・総合して得られた知見を要約して簡単に記す。

- 1) 今期鎌倉周辺を通過したサシバのルートは、『陸上ルート』と『海上ルート』に二分することができ、主に海上経由で南方から飛来し西方へ飛去した。
- 2) 陸上を飛ぶタカ類は、単独または数羽で、鎌倉特有の谷戸（やと）と呼ばれる入り組んだ地形に沿って、低空をゆっくりと移動していた。一方、海上を飛ぶサシバは、いわゆるタカ柱を形成しながら、高空を直線的に、速いスピードで移動していた。
- 3) 海上ルートでは、最大1日200羽以上のサシバが観察された。
- 4) 海上ルートは、海岸線から数kmの幅で、三浦半島南西部の小田和湾近辺から江ノ島を経て、茅ヶ崎の烏帽子岩付近の海上まで達していた模様だが、詳細な位置関係は特定できなかった。
- 5) 小田和湾から稲村ヶ崎へ至る海上ルートには、岬や島を経由して海岸沿いに移動するものと、海上を直線的に一息で長距離移動するものがあった。
- 6) 稲村ヶ崎周辺の上空には、しばしば数十羽のサシバが旋回しながら高空に舞い上がりタカ柱を形成していた。
- 7) 天園および逗子方面から源氏山へ至る陸上ルートが確認されたが、源氏山からの飛去ルートは、陸上と推定されるが明確ではない。
- 8) 陸上ルートでは、海上と異なりハチクマ、ハイタカ、ノスリ、ハヤブサ等、多種類のタカが混じって観察された。

考 察

以上の観察結果から、鎌倉周辺の今期のサシバの渡りルートは、従来想定されていた陸上ではなく、海上ないし岬、島を連ねた沿岸に存在したと考えられる。これは、サシバが岬や島など南面の急斜面に吹き寄せる南風によって生ずる上昇気流を利用して渡っていたためと推定される。他の観察者からの情報とあわせ、この『海上ルート』は、神奈川県東部の相模湾沿いに、三浦半島南部から葉山沖、江ノ島を経て茅ヶ崎の烏帽子岩へと続いていたと推定される。大崎、稲村ヶ崎、七里ヶ浜配水池、江ノ島での観察によると、沿岸沿いに来た個体と、直接沖合から飛来したように見受られる個体があり、10月10日に飯田義一氏も烏帽子岩で同様の観察をされている。このことから、観察精度を考慮しても、相模湾東部の海上ルートの幅は、数Km以上と解釈するのが妥当であろう。

一方、海上から飛来したものの一部は内陸に向かったが、源氏山、笛田など内陸部では高空を滑空して行くものの観察記録が十分でなく、飛去方向の裏付けがとれなかった。披露山・大崎公園での観察では、岬の上昇気流で高度を稼ぎ損なったものが内陸に向う傾向が見受けられ、源氏山での観察結果との強い相関関係がみられる。源氏山や笛田公園では強風・上昇気流の有無などの気象条件によって、かなり低空を複雑な地形（谷戸）に沿って移動する個体や、西から東へ逆行する個体なども観察されており、従来想定されていた陸上ルートは、今期に関する限りでは不鮮明であった。

課題と問題点

- 1) 今期の観察事例だけで、海上ルートの存在を結論することは早計と思われる。横須賀や藤沢・茅ヶ崎方面の協力を仰ぎながら、来シーズン以降の重要な観察課題としたい。
- 2) 大崎・稲村ヶ崎・七里ヶ浜・江ノ島付近で海上から陸上に向う一群が観察されたが、陸上ルートとの関連は、鎌倉から西の県内陸の観察記録が不足しているため不明である。
- 3) 海峡周辺部に限らず、サシバの群は海岸沿いに海上を移動する可能性がある。次の点に留意して観察を促したい。
 - a) 一度、群が通過すると、次の群の飛来まで長時間待つ必要がある。
 - b) 遠方の高空を速いスピードで移動し、海上には目標物が少ないため、距離感をつかみにくく、位置も特定しがたい。
 - c) 海上のタカ類を偶然発見できる可能性は低く、長時間継続して双眼鏡等で捜す必要があり、正確な個体数のカウントは困難である。
 - d) 調査精度を向上させるためには、複数の観察者で分業する必要がある。
- 4) 陸上ルートの調査において、地着きの個体か移動中の個体かの区別を、客観的に判断するために、渡りの定義や特徴的な行動のパターン化を試みる必要がある。
- 5) 現行の調査法および調査用紙は、既知の渡りルートでの変動調査には適するが、全国一律に使用することを考えると、汎用性が乏しく記入しにくいので、早急に改善が望まれる。
- 6) 調査者同士の横の連絡網が不足しているため、調査効率が向上しない。早急に都道府県単位の緊密なネットワーク作りが望まれる。
- 7) 前年の調査結果の概要と当年の調査目的を調査マニュアルに盛り込み、調査協力者には、少なくとも担当地域周辺の調査結果の概要を通知するなどのアフターケアが欲しい。

謝 辞

横浜自然観察の森のスタッフ一同と飯田義一氏・木村孝氏には、貴重な観察記録を提供していただきましたので、ここに御礼申し上げます。

要 約

- 1 1987年9月下旬から10月中旬に、鎌倉周辺を通過したサシバのルートは、『陸上ルート』と『海上ルート』に二分することができ、主に海上経由で南方から飛来し西方へ飛去した。
- 2 陸上を飛ぶタカ類は、単独または数羽で、鎌倉特有の谷戸（やと）と呼ばれる入り組んだ地形に沿って、低空をゆっくりと移動していた。一方、海上を飛ぶサシバは、いわゆるタカ柱を形成しながら、高空を直線的に、速いスピードで移動していた。
- 3 海上ルートでは、最大1日200羽以上のサシバが観察された。
- 4 海上ルートは、海岸線から数Kmの幅で、三浦半島南西部の小田和湾近辺から江ノ島を経て、茅ヶ崎の烏帽子岩付近の海上まで達していた模様だが、詳細な位置関係は特定できなかった。
- 5 小田和湾から稲村ヶ崎へ至る海上ルートには、岬や島を経由して海岸沿いに移動するものと、海上を直線的に一息で長距離移動するものがあった。
- 6 稲村ヶ崎周辺の上空には、しばしば数十羽のサシバが旋回しながら高空に舞い上がりタカ柱を形成していた。
- 7 伊良湖畔など特定の海峡付近に限らず、サシバは海岸沿いあるいは海上を渡っている可能性も

考えられるので、他地区においても海上に注目し観察記録を蓄積してほしい。

引用文献

- 日本野鳥の会. 1987. タカ渡り調査マニュアル. 日本野鳥の会, 東京.
 横浜自然観察の森. 1987. 森のなかま③「サシバ」. 森のたより. 4:2.
 鎌倉自主探鳥会グループ. 1987. サシバが相模湾東部を渡った!. はばたき. 196:2-3.
 鎌倉自主探鳥会グループ. 1987. 鎌倉周辺におけるタカ類の渡り調査報告. 鎌倉自主探鳥会報「瓦版・かまくら」. 72:9-11.

Migration of Hawks through Kamakura (1987)

Kamakura Jisyu Tanchoukai Group¹

1. From late September to the middle of October in 1987, the Gray-faced Buzzard-Eagle (*Butastur indicus*) passing through the Kamakura area migrated along two routes: the sea and the land routes. They came mostly by the sea route from the south and flew to the west.
2. The hawks flying over the land moved, alone or in small groups of four or five individuals, slowly at low altitudes along the complicated valleys called "Yato", a characteristic topography of Kamakura.
 On the other hand, Gray-faced Buzzard-Eagles which flew over the sea route formed so-called "Takabashira" — soaring in a group in a circle to get an ascending current — and glided up quickly to high altitudes.
3. On the sea route, the maximum number of Gray-faced Buzzard-Eagles in one day was more than 200.
4. The sea route seemed to stretch several kilometers wide from the south-west coast (Odawa Bay) of Miura Peninsula, to Eboshiwa rocks at Chigasaki via Enoshima island; however the related positions could not be specified in detail.
5. On the sea route, some Buzzard-Eagles glided along the coast line through islands and capes, and others migrated offshore straight from Odawa Bay to Inamuragasaki.
6. Over the Inamuragasaki area, 50-60 Buzzard-Eagles often made "Takabashira".
7. It is possible that Buzzard-Eagles migrate over the sea along the coast, not only along such a special channel as the Irakomisaki route, but also along the coast or over the sea. Observations along coasts concerning its migration over the sea are needed in other areas.

1. 2-6-1 Sasuke, Kamakura-shi, Kanagawa 248